

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3年計画の2年目)

1. 研究課題

「日本の伝統文化」を問い直す

Reconsidering the Concept of “Japanese Traditional Cultures”

2. 研究代表者氏名

重田 みち

Shigeta Michi

3. 研究期間

2020年4月-2023年3月(2年目)

4. 研究目的

明治期以来「日本の伝統文化」の重要な一翼をなすものと位置づけられ、紹介されてきた芸道文化—茶道・能楽・花道・蹴鞠等、及びその空間を構成する建築・庭園・絵画・器物等の文物—は、実際のところ、中世以来の芸道文化の実態を忠実に反映してはいない。

①「日本」文化とは言っても実際には大陸文化的性質が強い、②芸道文化を規定してきたとされる「禅」文化にしても、実際のところ様々な思想的・文化的要素から複雑に構成されており、単線的な影響関係を想定することが困難である、③欧米に対抗するために近代日本が要請したのが「伝統」という権威付けであり、結果、芸道が古来変わらぬものであるかのような静態的な印象を仮構している、等々の問題点である。そのような理解によって不可視化された芸道の様々な面に着眼し、あらためて歴史的・実証的な考察を加え、近代以降の理解を乗り越える視座を獲得することを本研究班の目的とする。

This project addresses so-called “Japanese traditional culture”. This refers to the geidō culture (geidō) that includes the tea ceremony, Noh performance, flower arrangement, kemari (traditional Japanese football game), and other forms of art as well as architecture, gardens, paintings, and artifacts, [all of which comprise the cultural ‘space’. These artforms have been regarded as an intrinsic part of “Japanese traditional culture” since the Meiji era. Later, D. T. Suzuki and Shinichi Hisamatsu introduced them to the West, stating that their spirit was underpinned by “Zen”. Since then, scholars who study this culture and its manifestations have tended to accede to this assessment.

These positions and explanations of geidō, however, may not reliably reflect its true nature going back as far as the Middle Ages to present. Since: (1) In the historical context, such “Japanese” culture was deeply influenced by

continental culture. (2) Geidō cannot be regarded as being exclusively derived from Zen, but rather the influence of Confucian rituals in ancient China, neo-Confucianism of the Song-Yuan dynasties, and Chinese Buddhist sects other than Zen need to be considered as well. In short, it consists of a complex amalgam of various ideological and cultural elements. (3) The term “traditional culture” in the Modern era was introduced in order to give this kind of culture some form of ‘authority’ to compete with the West. The introduction of this term has had a certain effect, however, it also easily gives the impression, opposite to the facts, that geidō has not changed since ancient times. In reality, new elements have often been added and it has evolved in response to the social circumstances that prevailed at different times in history, not only in the Premodern era, but also from the Modern era to the present day.

To gain a new perspective to challenge the former perception of geidō as “Japanese traditional culture”, this research project presents some historical and empirical studies that focus on various cultural aspects that have been overlooked.

5. 本年度の研究実施状況

本年度は計6回の研究会を開催、美術史、工芸史、書道史、神道史、仏教史、儒教史、文化史などの分野での検討を重ねた。中国・朝鮮をはじめとする諸外国との文化交流が伝統文化形成に与えた影響、禅宗寺院などの伝統文化形成における具体的な場の役割、近代以降に成立するナショナル・ヒストリー的な枠組みによる研究展開の到達点と問題点、等々の論点を再考した。

6. 本年度の研究実施内容

2021-06-20 松崎慊堂の和州重視 発表者 古勝隆一 コメンテーター 神津朝夫 奈良県立大学 Differences in shippo-yaki research between Japan and the West 発表者 シビル・ギルモント ヴェルツブルク大学 コメンテーター 呉 孟晋

2021-09-05 日本書道史における中国風・日本風言説の諸相—平凡社『書道全集』を例として 発表者 成田 健太郎 文学研究科 コメンテーター 重田みち 京都芸術大学 近代日本の文物をめぐる営為と龍門石窟 発表者 稲本泰生 コメンテーター 高階 絵里加

2021-10-31 阿弥号からみる同朋衆と時衆—『経覚私要鈔』を一例として— 発表者 今枝杏子 神戸女学院大学 コメンテーター 柳 幹康 東京大学 「神国」の中の孔子—『古今著聞集』から見えてくること 発表者 水口拓壽 武蔵大学 コメンテーター 陳 佑真 帝京大学

2021-12-19 泉涌寺流の宋式僧院生活と実践 宋文化受容の一事例としての「茶」「花」 発表者 西谷 功 泉涌寺 コメンテーター 上川 通夫 愛知県立大学 本研究班前半の総括

と今後の展望——付：近現代における「同朋衆」概念 発表者 重田みち 京都芸術大学
2022-01-23 花道史における中国瓶花 発表者 井上 治 京都芸術大学 コメンテーター
重田みち 京都芸術大学 中江兆民による朱子学受容 発表者 福谷彬 コメンテーター 外
村 中 ヴェルツブルク大学
2022-03-13 大阪壺井八幡宮八幡神及諸神坐像と中世の神仏関係 発表者 田中 健一 文化
庁 コメンテーター 稲本 泰生 京大人文研で「日本の伝統文化」を問い直すために—歴
代所員の業績の再検討のころみ、林屋辰三郎『町衆』を中心に— 発表者 菊地暁 コ
メンテーター 神津 朝夫 奈良県立大学

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

稲本 泰生、岡村 秀典、菊地 暁、古勝 隆一、高木 博志、高階 絵里加、平岡 隆
二、呉 孟晋

学内

王孫 涵之(文学研究科博士課程後期)、成田 健太郎(文学研究科准教授)

学外

重田 みち(京都芸術大学)、今枝 杏子(神戸女学院大学)、井上 治(京都芸術大学)、上
川 通夫(愛知県立大学)、シビレ ギルモンド(ヴェルツブルク大学)、神津 朝夫(奈良
県立大学)、佐々木 孝浩(慶應義塾大学)、外村 中(ヴェルツブルク大学)、竹内 有一
(京都市立芸術大学)、田中 健一(文化庁)、陳 佑真(帝京大学)、西谷 功(泉涌寺・心
照殿)、ガリア ペトコヴァ(関西学院大学)、水口 拓壽(武蔵大学)、宮崎 涼子(京都芸
術大学)、柳 幹康(東京大学)

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	海外研究者	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
学内(法人内)	1	12		2	2	1	72		12	12	6
		(1)					(6)				
国立大学	1	1					6				
公立大学	2	2					12				
私立大学	7	8		1	1		48		6	6	
		(3)					(18)				
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関	1	1					6				
民間機関	1	1					6				
外国機関	1	2	2				12	12			
		(1)	(1)				(6)	(6)			
その他 ※											
計	14	27	2	3	3	1	162	12	18	18	6
		(5)	(1)	(0)	(0)	(0)	(30)	(6)	(0)	(0)	(0)
※「その他」の区分受入がある場合 具体的な所属等名称を記載：例) 高校教員 無所属の場合は機関数0とカウントし、この欄の記載不要											

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

なし

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由

なし

12. 次年度の研究実施計画

2022年度は前半は共同研究班員ならびにゲストスピーカーの個別報告により、「日本の伝統文化」の再検討に関わる個別分野研究の深化をめざし、年度後半は、2023年度の研究論集刊行を目指し、ドラフトの検討会を実施する予定である。

13. 次年度の経費

		開催回数	国内出張旅費（延べ人）	支出予定額
国内旅費	研究会参加費	6	30	450000
	一般旅費			0
海外旅費	渡航旅費			0
	招へい旅費			0
謝金（講演謝金、研究協力者金、その他の謝金）				100000
消耗品等経費				100000
その他				50000
合計				700000

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

2023 年度中の研究論集刊行を目指して作業を進めていく予定である。